

半田市政に関する提言書

令和8年8月23日、29日に開催いたしました「HANDA市民討議会 2026」において討議された意見等を取りまとめ次のとおり提言いたします。

討議テーマ

見つけよう！半田の”居心地のいい”コミュニティ
～「情報が届く・選べる・つながる」人が主役の地域づくり～

コミュニティの定義

ここでいう「コミュニティ」とは、同じまちで暮らしたり働いたりする、いろいろな人や団体・組織が、居心地よく安心して毎日を過ごせるまちをつくるために集まって活動する「地域コミュニティ」を指します。

課題整理

半田市は少子高齢化・人口減少が進む中、自治会機能の低下や地域のつながりの希薄化に直面しています。既存のコミュニティも、担い手不足に伴う運営体制や活動場所の利用のあり方が変化する中で、これまで当たり前にあった居場所機能が失われつつある例が見られます。

また、コミュニティ活動の情報が十分に行き届いておらず、更なる周知・機能拡充が期待される状態です。

半田で生まれ育った人だけでなく、半田で働く人・半田に移り住む人にとっても「ここに居続けたい」「ここに来てみたい」と思えるまちであり続けるために、既存の仕組みを土台として活かしながら、市民・企業・行政が協力して情報が届き、選べ、つながる仕組みを整えていく必要があると考え、提言します。

目指す姿

情報が届き、選べ、つながることで、誰もが居心地よく過ごせ、地域全体の活力につながることを目指します。

1. 必要な情報が、必要な人にきちんと届くまち
2. 一人ひとりが自分に合った関わり方を選べるまち
3. 世代や立場を越えて出会い、つながり、支え合えるまち

提言

1. 情報が「届く」仕組みづくり

(1) 既存の媒体・情報基盤の見直し

市報やホームページにコミュニティ関連情報の専用枠を設け、QR コード等で詳細情報へすぐアクセスできるようにする

(具体例) 市報に「コミュニティ便り」のような固定枠を設け、詳細情報は市ホームページの特設ページに集約。QR コードで市報からホームページへ直接アクセスできるようにする。

(2) タッチポイントでの確実な情報接続

転入時の住民届提出など、既存の行政手続きの機会を活用し、コミュニティの存在を案内する

(具体例) 住民届の提出窓口で、コミュニティ活動をまとめた案内カードやチラシを手渡し、転入者が最初の手続きの場でコミュニティの存在を知れるようにする。

(3) あらゆる世代の情報リテラシーに合わせた対応

SNS やスマートフォンを日常的に使わない人のためにも、公共施設等での案内掲示や有線放送など、複数の手段を組み合わせで情報を届ける

(具体例) 病院・老人ホーム・リハビリ施設・学校・役所・交番など、市内各所に情報案内用の専用端末を設置する。

世代によって情報の受け取り方・関わり方を踏まえ、日常的に立ち寄る場所等とも連携した周知を検討する

(具体例) 飲食店を始め、若者が日常的に集まる店舗にポスターやチラシを掲示し、アプリやコミュニティの存在を知ってもらう間口を広げる。

2. 関わり方を「選べる」仕組みづくり

(1) 自分に合った探し方ができるよう既存の媒体・情報基盤の見直し

既存のコミュニティ情報を土台としつつ、地区・時間帯・興味関心などの条件でコミュニティやイベントを探せる検索・閲覧のしやすい情報へ機能拡充する

(具体例①) 地区・時間帯・ジャンル(コミュニティ／ボランティア／イベント)で絞り込める検索サイトを整備し、フリーワードでも検索できるようにする。

(具体例②) 検索が苦手な人向けに、「なんとなくこんな感じのイベントを探している」という自然な文章から候補を提示する AI 検索機能も組み合わせる。

(2) 施設・情報の一元化と可視化

利用できる公共施設・民間施設の情報をまとめ、空き状況や予約状況が分かる仕組みを整える

(具体例) 公的施設・民間施設(食堂やカフェ等)を地図上にマッピングし、クリックするとカレンダーで空き状況が分かり、その場で予約まで完結できるようにする。

(3) 参加のハードルを下げる設計

「見るだけ」の参加も可能とし、気軽に関われる設計とする

(具体例) SNS 型コミュニティを立ち上げ、参加は「見るだけ」でもよく、必要な時だけ関われるようにする。

(4) 運営支援と参加環境の整備

コミュニティの運営者が参加者を受け入れやすい場づくりを進められるよう、学びの機会や活動を後押しする仕組みを設ける

(具体例) コミュニティの運営者向けに、場づくりのノウハウを学べるワークショップを開催するとともに、参加者増加につながるインセンティブ(ポイント制度等)を用意し、運営側の受け入れ体制そのものを後押しする。

誰もが物理的に参加しやすいよう、活動の場や移動手段などの環境に配慮し、整備する

(具体例) 拠点となる施設のバリアフリー化を進めるとともに、イベント開催時には無料で利用できる送迎バスを運行するなど、物理的に参加しやすい環境を整える。

3. 人と人が「つながる」場づくり

(1) 交流拠点の整備

既存の公共施設等を活用し、趣味や学びを通じて世代を越えた交流が生まれる拠点を整備する

(具体例) 既存の学校施設を流用して工房を設置し、ものづくりを通じた人とのふれあいや知識・技術の向上、ものを大切にする心を学ぶ場とする。

誰もが気軽に立ち寄れる居場所を用意し、運営負担を抑えた仕組み(無人運営やICTの活用等)も取り入れる

(具体例①) QRコードでの入退室管理により、担当者を置かなくても運営できる立ち寄り拠点をつくる。家にいたくない人など、誰でも気軽に利用できるようにする。

(具体例②) 公共施設だけでなく、身近な店舗を、人が集い交流する場としても活用し、地域のつながりの創出につなげる。

（２）市民主体の運営と行政の後押し

拠点の運営は、市民が担い手・参加者として主体的に関わる

行政は場の提供や立ち上げ時の支援、運営上の相談先としての役割を担い、市民への運営の主体移行を意識した運営を行う

（具体例）立ち上げ当初は行政が主体となって運営し、活動が軌道に乗った段階で市民運営へ移行する。

（３）支え合いの担い手づくり

趣味や「好き」を入口として、支え合いの担い手を継続的に呼び込む

（具体例）ポスターやショップカードなど、店舗・観光地・イベントでの周知に加え、初めて登録した人にポイントを付与し、参加の一步目を後押しする。

経験や技能を持つ高齢者が、自らも担い手として活躍できるコミュニティをつくる

（具体例）シルバー人材が、工房の設備を使って自らものづくりを楽しむとともに、培った技能を次の世代に伝える担い手のコミュニティとして活躍する。

私たちにできること

私たちはこの討議会を通じて、半田市が抱える人口減少や地域のつながりの希薄化という課題を、自分たちの暮らしに関わる身近な問題として改めて認識しました。行政にお願いするだけでなく、私たち市民自身も、次のことに取り組んでいきます。

市内で行われている既存のコミュニティ活動やイベントに、まずは「見るだけ」からでも積極的に参加していきます。参加する中で自分に合った関わり方が見つければ、支え合いや交流の担い手として一歩踏み出します。また、自分が知っている情報やコミュニティの魅力を、周囲に発信し、まだつながっていない人に届ける役割を、私たち自身も担っていきます。

令和8年10月29日

半田市長 久世 孝宏 様

HANDA市民討議会実行委員会

委員長 榊原 太